

氏 名	秦 小 麗
学位の種類	博士（文 学）
学位記番号	文 博 第 205 号
学位授与の日付	平成 14 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 歴 史 文 化 学 専 攻
学位論文題目	中国初期国家形成過程における地域動態

論文調査委員 (主 査) 助教授 岡 村 秀 典 教 授 上 原 真 人 教 授 山 中 一 郎

論 文 内 容 の 要 旨

中国の初期国家形成過程に関するこれまでの考古学的研究は、土器で設定した文化類型を文献史料に記録された部族の活動範囲と結びつけて解釈することが多かった。しかし、神話伝説的な文献史料に確たる信頼が置けない以上、この方法には限界がある。また、遺跡ごと地域ごとに分析すると、土器様式的具体相は複雑に錯綜し、文化類型として時間的・空間的に分節化するのは必ずしも容易ではない。これは相互交流などの地域動態が土器様式に反映されているからで、このような交流の実態にこそ初期国家の形成過程を分析する鍵があると判断した論者は、二里头時代・二里岡時代の諸遺跡から出土した土器様式を以下の手順で分析する。

- ①土器を形態にもとづいて地域系統に分類する。
- ②数量的手法を用いて各系統の構成比率を遺跡ごとに算出する。
- ③上記①②の方式でとらえた土器様式の通時の変化から各遺跡を性格づける。

そして、王都を頂点とし、地方の拠点となる城郭都市、一般集落という階層秩序を抽出して、解明した土器様式の地域動態をおもな根拠に、初期国家形成過程を具体的に描き出すのである。

第2章「土器の形式分類と系統識別」および第3章「中心地における土器様式の変遷」では、二里头・二里岡時代の中心的遺跡である河南省の二里头遺跡、鄭州商城遺跡、偃師商城遺跡の3遺跡の土器を分析し、土器様式の時間的変遷を明らかにする。これを受けて第4章「二里头時代の地域動態」では、二里头時代の周辺地区に属する山西省西南部、河南省北部、河南省東部、河南省南部における具体的な遺跡をとりあげて、各遺跡の土器様式を分析する。

二里头時代の中心地の土器は、在地の伊洛系土器（A）のほか、周辺地区の東下馮系（B）、輝衛系（C）、漳河系（D）、岳石系（E）の土器が混在する。これは伊洛・鄭州地区が周辺地区と多様な交流をもったことを示す。ただし、在地の伊洛系土器は器種も量も豊富で、一貫して主流を占めていた。二里岡時代になると、周辺地区の土器はほとんど消失し、伊洛系と新たに出現した伊洛・鄭州系（AD）のみが占める。

周辺地区の山西省西南部では、在地の龍山文化に由来する器種以外に、南の伊洛系と北の東太堡系との関係が顕著である。東太堡系は東下馮類型の成立に大きな影響を与え、以後も一定の割合を占める。しかし、二里头第3期以後は伊洛系要素が顕著となって在地系土器を凌駕し、その割合は伊洛地区からの距離に反比例して減じる地理的勾配を示す。河南省北部でも第3期以後、南の伊洛系や北の漳河系の割合はそれぞれ明確な地理的勾配を示し、在地の輝衛系は中心となる衛河上流域で最も比率が高い。河南省東部では、在地の龍山文化に由来する器種のほか、西の伊洛系、北の漳河系、東の岳石系とから構成される。前半期には各地区で伊洛系が85%以上の高比率を見せるが、後半期になると鄭州地区以東で漳河系が急激に増加し、第6期には40%前後に達する。その反面、伊洛系は前半期よりも減少し、伊洛系と漳河系が拮抗する。河南省南部では、在地の龍山文化に由来する器種のほか、北の伊洛系が大量に存在する。ただし、東の淮河流域では、在地系・伊洛系のほか、岳石系も一定量存在し、時間的変化よりも地域的変化が顕著にあらわれる。

伊洛系が主体となる土器様式の分布範囲は、二里頭第1期では伊洛地区と鄭州地区に限られる。二里頭第2期には、伊洛地区の土器様式は伊洛系と外来の東下馮系で構成され、第2期前半には河南省南部と東部に、後半には山西省西南部にも伊洛系を主体とする土器群が出現する。二里頭第3期は伊洛地区が最も繁栄した時期で、二里頭遺跡では2つの大型宮殿址、青銅器鑄造工房址、青銅器や玉器を副葬した墓が発見されている。この繁栄を裏づけるように、伊洛地区の土器様式は全体の7割を占める伊洛系を主体とし、残りを東下馮系、輝衛系、漳河系が占める。しかも、周辺地域への伊洛系の影響はさらに拡大し、山西省西南部や河南省北部では在地系を凌駕し、山西省中部にもその影響が及んでいる。しかし、第4期の二里頭遺跡は、宮殿が破壊され、政治的中心から一般集落に没落する。伊洛地区の土器様式も大きく変化し、伊洛系を主体としつつも漳河系が増加し、ごく少量ではあるが東の岳石系が加わる。第4期も後半になると、鄭州商城内の宮殿区で漳河系の比率が著しく増加する。とくに、従来の伊洛系深腹罐や鼎に代わって、漳河系の鬲が煮沸器として主体を占めるようになる。このような漳河系の器形に伊洛系の調整法が融合し、伊洛・鄭州系土器が生まれる。この伊洛・鄭州系こそが次の二里岡時代に最も特徴的な土器群となる。

第5章「二里頭時代から二里岡時代への転換」では、二里頭時代から二里岡時代に存続した複合遺跡をとりあげて土器様式の変遷を解明する。そして第6章「二里岡時代の地域動態」においては、伊洛・鄭州地区、河南省東部、河南省北部、山西省西南部の諸遺跡をとりあげて、二里岡時代の地域動態を明らかにしている。

二里岡下層期前半では、伊洛・鄭州系土器群の器種が増え土器様式が確立する。中心地の偃師商城と鄭州商城では、伊洛系と伊洛・鄭州系とが8～9割を占める。二里岡下層期後半では、中心地で確立した伊洛・鄭州系土器群が周辺地域に拡大し、土器様式が一元化する。鄭州商城では伊洛・鄭州系がすべてを占め、周辺地区でも9割前後を占めて他系統の存在を許さない。二里岡上層期には斉一化の範囲はさらに拡大し、河南省東部に達する。つづく白家莊期になっても土器様式の変化は少なく、岳石系の比率が前後するのみで、伊洛・鄭州系は安定した様相を呈する。このように中心地の土器様式が短期間で周辺地域に拡大し斉一化するのは、鄭州商城・偃師商城勢力が、前代の伊洛地区勢力よりもさらに強大な影響力をもって進出したことを示す。

二里頭時代から二里岡時代の土器様式の変化が示す地域間交流は、対等な立場の相互交流ではなく、中心地から周辺地区への一貫した拡大波及である。しかし、中心地でも各地の影響を受けて土器様式が変化し、二里頭遺跡から鄭州商城・偃師商城へと拠点を移す。伊洛・鄭州系の土器様式が成立する二里岡下層期前半に、鄭州商城では内城、偃師商城ではいわゆる小城が建設される。城壁規模は壮大で中心地にふさわしい。つづく二里岡下層期後半には、周辺地区に城郭をもつ集落が建設される。山西省西南部の東下馮・垣曲商城、河南省北部の府城遺跡である。これらの地方の城郭遺跡は、城郭の設計や築城の技術が中心地の鄭州商城や偃師商城と共通するだけでなく、出土する青銅器や玉器、墓葬の特徴も中心地と共通する。二里岡上層期に出現する湖北省の盤龍城遺跡もこれらの例にもれない。しかし、周辺地区の4つの城郭遺跡は、鄭州商城の20分の1以下の面積で、規模がまったく異なる。また、城郭の出現にともない、周囲に存在した集落はほとんど廃絶する。つまり、二里岡時代の土器様式の斉一化は、鄭州・偃師商城勢力の進出と地方支配の実態を反映しているのである。周辺地区における一般集落の土器様式が一元化するのは、一段階遅れた二里岡上層期で、二里岡時代の土器様式が、王都、地方拠点城郭、周囲の一般集落という階層的な経路をへて拡大していく様子が看取できる。

二里頭時代と二里岡時代の土器様式の地域動態を比較すると、両時代にはいずれも明確な中心地があり、中心地の土器系統が周辺地区に拡大波及する点では共通する。しかし、拡大に要した時間には大きな差がある。二里頭時代には、河南省南部から北方へと段階的に波及するのに対して、二里岡時代には中心地で土器様式が確立した次の段階には、ほぼ同時に四方へ拡散する。また、中心地の要素が進出する度合においても、二里頭時代には近隣から遠方へと段階的に増加するのに対し、二里岡時代には拡散と同時に在地の要素はほぼ消滅する。地方の拠点集落においても、二里頭時代の土器様式が当該地の地理的位置に影響されて様々な様相をもつものに対し、二里岡時代の地方拠点の土器様式は中央と変わるところがない。つまり、二里頭時代に比べて、二里岡時代の中心地勢力の地方への影響力には格段の差がある。要するに、二里頭時代から二里岡時代への転換は、社会の統合形態、地方の支配構造において大きな違いがあり、土器様式の地域動態からその違いを読み取ることができるのである。これは、まさに中国初期国家の形成過程における2つの段階なのだと、論者は結論づける。

論文審査の結果の要旨

中国初期国家の形成過程に関するこれまでの考古学的研究は、土器で設定した文化類型を、戦国時代以降の文献史料に記された夏や商（殷）王朝の活動範囲と結びつけて解釈することが多かった。しかし、神話伝説的な文献史料に確たる信頼が置けない以上、この方法には限界がある。また、遺跡ごと地域ごとに土器の系統を分析すると、文化類型として時間的・空間的に截然と分節化するのは必ずしも容易ではない。それは地域間の相互交流によって土器の諸系統が複雑に錯綜しているからで、このような複雑化した相互交流の実態にこそ初期国家の形成過程を分析する鍵があると判断した論者は、二里頭時代・二里岡時代の黄河中流域について、①土器を形態にもとづいて大きく6つの地域系統に分類し、②数量的手法を用いて各系統の構成比率を遺跡ごとに算出し、③以上の方法でとらえた土器様式の時間的・空間的な変化から国家形成期の地域動態を描き出そうとしている。

本論文は、問題の所在、研究史の整理、分析手順を提示した序章と6章からなる本論で構成される。本論文を特徴づけるのは、何よりも数量的手法を用いた土器様式の分析であろう。このような数量的な分析方法は、わが国はもとより中国でもかつてなく、とりわけ土器の法量比較や土器表面に印された縄目数の計測は、日本考古学の方法を参考に実地の資料調査を積み重ねた論者ならではの着眼点であり、日・中の学会誌や国際学会においても高い評価を受けている。この方法による本論の具体的な成果は、次のようにまとめられるであろう。

黄河中流域における二里頭時代の土器は、河南省中部の伊洛系、山西省西南部の東下馮系、山西省中部の東太堡系、河南省北部の輝衛系、河北省南部の漳河系、河南省東部から山東省にかけての岳石系の6系統に大別できる。伊洛系は夏人の、漳河系は商（殷）人の土器様式であり、出自の異なる族集団が各地域に住み分けていたと考える通説に対して、論者は、遺跡ごとに各系統の比率が変化していることを確かめ、そこに地域間の交流の実態が反映されていると考える。土器様式を静的、固定的にとらえるのではなく、人の動きとともに土器様式は変化する、というのが論者の主張である。中心となる伊洛地区では、二里頭第2期に東下馮系の要素を加えて伊洛系土器様式が成立し、二里頭遺跡に大型宮殿、青銅器の鑄造工房、青銅器や玉器などを副葬した墓が出現する第3期には、伊洛系土器が7割以上を占める。しかし、第4期の二里頭遺跡は、宮殿が破壊され、政治的中心から一般集落に没落する。伊洛・鄭州地区の土器様式は伊洛系を主体としつつも漳河系が増加し、とくに第4期後半の鄭州商城遺跡では漳河系の器形に伊洛系の製作手法を取り入れた伊洛・鄭州系土器が生成する。いっぽう、周辺地区の山西省西南部では、在地の東下馮系を主体に、南の伊洛系と北の東太堡系とを加えて土器様式が成立する。しかし、二里頭第3期以後は伊洛系が顕著になって在地系を凌駕し、その割合は伊洛地区からの距離に反比例して減じる地理的勾配を示す。河南省北部でも第3期以後、在地の輝衛系よりも南の伊洛系や北の漳河系の割合が増加し、それぞれ明確な地理的勾配を示している。河南省東部では、前半期には伊洛系が85%以上を占めるが、後半期には漳河系が増加し、伊洛系と伯仲する。河南省南部では伊洛系が主体を占めるが、東にいくほど岳石系土器の比率が高くなる。以上のような土器様式の動態について、論者は、中心地である伊洛地区に特徴的な土器群が周辺地区へ拡大していく過程として理解する。

通説では、漳河系土器の担い手である商（殷）人が伊洛系土器の担い手である夏人に代わって王朝を樹立したのが二里頭時代と考えられている。しかし、土器様式は伊洛系から漳河系へと単純に交代したわけではない。中心となる偃師商城遺跡と鄭州商城遺跡では、二里岡下層期前半に伊洛系土器と二里頭第4期後半に成立した伊洛・鄭州系土器とで8～9割を占め、下層期後半には伊洛・鄭州系土器にはほぼ一元化するとともに、それが周辺地区に広がり、二里岡上層期には斉一化の範囲はさらに拡大する。このように伊洛系土器が二里頭時代になお基底的な要素となって存続していることは、王朝の交代が土器様式の転換という明瞭な形で表れないことを示し、文献史料を併用して歴史を復元しようとする従来の考古学の解釈には問題がある。ただし、中心と周辺という視点から見れば、二里頭時代から二里岡時代の地域間交流は、対等な立場の相互交流ではなく、中心から周辺への一貫した拡大波及として理解できる。中心となる伊洛・鄭州地区では、二里頭遺跡から鄭州商城・偃師商城遺跡へと拠点が移動するが、伊洛・鄭州系の土器様式が成立する二里岡下層期前半に、鄭州商城と偃師商城では壮大な城郭が築かれ、つづく二里岡下層期後半には、周辺地区にも城壁に囲まれた集落が建設される。山西省西南部の東下馮・垣曲商城、河南省北部の府城遺跡である。これらの地方の城郭遺跡は、城郭の設計や築城の技術が中心地の鄭州商城や偃師商城と共通するだけでなく、出土する青銅器や玉器、墓葬の特徴も中心地と共通する。また、城郭の出現にともな

い、周囲に存在した一般集落はほとんど廃絶する。論者は、これを鄭州・偃師商城勢力の進出と地方支配の実態を反映したものにとらえ、二里岡時代の土器様式が、中心地の王都、地方の拠点城郭、一般集落という階層的な経路をへて拡大・齊一化していったと説明している。

二里頭時代と二里岡時代の土器様式の地域動態を比較すると、両時代には伊洛・鄭州地区に明確な中心地があり、中心地の土器様式が周辺に拡大波及する点では共通する。しかし、二里頭時代には河南省の東部と南部から河南省北部・山西省西南部へと段階的に波及するのに対して、二里岡時代には中心地で土器様式が確立した次の段階には四方の周辺地区に拡散し、在地の要素はほぼ消滅している。二里頭時代に比べて、二里岡時代の中心地勢力の地方への影響力には格段の差があり、地方における拠点的な城郭の設置を考えあわせるならば、中央による地方の支配体制が飛躍的に強化されたと解釈できる。論者は、これを中国の国家形成における2つの段階なのだと結論づけている。

本論の各章は、すべて土器の精緻な分析にもとづいた堅実な論考であるだけでなく、上述したように論文全体が一貫した視角と論理で明快に論じられている。本論文に結実した論者の研究によって、従来の研究上の問題点が明らかになり、中国の国家形成期における複雑な地域間交流と、中央による地方の支配体制が二里頭時代から二里岡時代へとしだいに強化されていくプロセスとが、明確な実体をともなって理解されるようになった。新石器時代に比べて立ち後れていた二里頭時代・二里岡時代の地域動態の研究が、本論文によってはじめて明確な方向づけがなされたといっても過言ではない。とはいえ、今後検討すべき課題もいくつか見うけられる。中心から周辺への一方的な影響力の拡大を強調するあまり、周辺から中心への影響、周辺と周辺との間の交流が十分に評価されていない。とくに、伊洛系土器が成立する際の東下馮系土器と伊洛・鄭州系土器が生成する際の漳河系土器とは、それぞれ中心地の土器様式に大きな影響を及ぼしているだけに、双方向的な交流の実態にもう少し配慮が必要ではなかったか、とも思われる。また、中心地の王都、地方の拠点城郭、一般集落という集落の階層的秩序を論じるには、用いた資料がやや少なすぎる。しかし、これらの点は博士論文としての価値を何ら損なうものではなく、論者の今後の調査と研究によって克服されるであろうことはいうまでもない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2002年1月28日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。